中谷林太郎先生　追悼の言葉

三瀬勝利（みせかつとし）
Katsutoshi MISE

薬剤耐性プラスミドの発見者として高名な中谷林太郎東京医科歯科大学名誉教授は、2016年6月4日に動脈瘤破裂によりご逝去されました。約91年と7カ月のご生涯でした。年齢には不満がないと言われる方もありそうですが、前日までお元気であられたことを思うと、ご逝去は残念という他はありません。心よりご冥福をお祈りします。

先生は一昨年の晩秋に、相思相愛の奥様に先立たれた後はひどく落ち込まれ、体調を崩された時期がありました。近年は大半の家庭でそうですが、妻がリーダーになり、夫を指導監督する傾向があります。この傾向は特に中谷林太郎夫妻においては顕著でした。奥様のご逝去により、日常生活で気合を入れてくれる指導者を失われた先生の心の中で、大きな空白が生じたのではないかと、恐れ多くも拝察していました。幸い、お嬢様やお孫様達の献身的なサポートにより、先生は徐々に元気を回復されてきました。事実、本年4月に中谷門下高弟の吉倉廣様（国立感染症研究所元所長）と岡村登様（東京医科歯科大学名誉教授）、それに低弟の私の3人がご自宅をお訪問した時は完全に回復されており、3時間以上に渡って会話を楽しんでおられました。4年後に開催される東京オリンピックも、会場で見学されたいようでした。それが叶えられなくなったことも残念です。

1. 中谷林太郎先生の略歴

先生は1924年11月10日に福井県にお生まれになり、戦中戦後の混乱期にあったとはいえ、1947年9月に22歳という若さで東京大学医学部を卒業されています。医学実施研修後に、新設間もない国立予防衛生研究所（予研；現国立感染症研究所）細菌部に入所されました。先生は1968年に国立公衆衛生院・衛生微生物学部長に昇任されるまでの20有余年を予研で過ごされています。その間になされた先生の最大の業績は、中村明子博士（現東京医科大学特任教授）たちと共著で発表された薬剤耐性（R）プラスミドの発見です。現在は薬剤耐性菌の蔓延により抗菌薬の効果は減弱し、化学療法に暗影が投げかけられています。本年6月の伊勢サミットでも取り上げられたように、薬剤耐性菌問題は世界的に憂慮すべき問題になっています。この面での先生が果たされた先駆的業績はとてつもなく大きいことが分かります。

国立公衆衛生院時代の5年間では、先生は地方衛生研究所の研究員たちの教育にも力を注いでおられます。1973年以降は、東京医科歯科大学（以下、医科歯科大）医学部微生物学教授に転任となり、当時の文部省や厚生省の各種委員を兼任されるとともに、医科歯科大の医学部長、評議員などの顕職を歴任され、1990年に定年退官されています。その間に大学や大学院を中心に、数多くの有為な研究者を育成されています。医科歯科大を退職された後は、人も羨む日本女子大学家政学部教授に就任され、麗しき才媛たちに囲まれた幸福な教授生活も送っておられます。才媛たちは先生の風貌が似ているところから、「ムーミン・パパ」という愛称を先生に謹呈しています。誠実で立派な方には、こうした余禄が回ってくるのだと羨ましく思ったものです。

日本女子大学を退職された後は、先生は常勤職に就かれることはありませんでしたが、多くの学会や学術団体に関係され、後進の教育や援助のために尽

国立医薬品食品衛生研究所客員研究員

力されました。こうした功績が評価され、2002年4月には勲三等旭日中授章を授章されています。

2. 中谷先生の人柄と思い出

中谷先生に私が初めてお会いしたのは1962年の秋のことでした。目黒にあった予研（現国立感染症研究所）に伺い、次年度から先生の研究室でお世話になるためにご挨拶をしたことを、鮮明に記憶しております。その日は逝去されたばかりの小島三郎先生（予研第2代所長）のご遺体を乗せた霊柩車が、最後の別れで予研の中庭をゆっくりと回っているのを、先生と並んでお見送りしました。後年、私自身が小島三郎記念文化賞などの顕彰事業を行っている黒住医学研究振興財団に関係することになるとは、その時は夢想もしませんでした。

その後の先生とお付き合いは50有余年に及びましたが、先生が怒りの感情を示されたことを見たことは一度もありません。「温厚」という言葉は先生の性格を最もよく表している言葉だと思います。なお、中谷先生が私にも怒りの感情を示されなかったのは、私が品行方正な人間であったためではありません。実際は書くまでもなく逆で、予研時代では、中谷先生の上司であられた福見秀雄細菌第一部長（後に予研所長や長崎大学学長を歴任。中谷先生は福見部長の下で室長）には、随分怒鳴りつけられました。福見先生は中谷先生とは逆に、所謂沸点の低い方で、毎日のように怒鳴り声を張り上げておられました。福見先生から不当に怒鳴られたという記憶がありませんので、非はすべて私にあったはずです。

中谷先生は又、強い喜怒哀楽の感情をあらわにされることもありませんでした。まことに懐の広い大人でした。慎重で堅実な方だという印象がありますが、こちらの方は「温厚」という言葉ほどフィットしていない感じがします。実は慎重なようで、時々想像を絶するエラーをされたこともあります。一例をあげますと、消毒用のクレゾール噴霧器を自分の顔に向けて噴霧されたことがあります。眼鏡をかけておられるので大事には至りませんでしたが、同じエラーを複数回繰り返されたのには驚きました。お嬢様のお話では、家の庭の芝刈りで電線も刈られ、騒ぎになったことがあったそうです。「さもありなん」というのが感想です。「長者の失策は凡人の慰め」と言うようですが、中谷先生が身近に感ぜられた瞬間でもありました。

3. 移りゆく　とき見るごとに

先生の学問的業績は何と言っても薬剤耐性機構の解明にありましたし、現実に先生が扱われていたNR1プラスミドやそれらの耐性遺伝子は、現在も広くバイオテクノロジー分野の貴重な道具として、世界中で使用されています。この面での先生の研究の影響はますます増大していると言っても良いでしょう。先生はまた、予研の本庄重男先生達と、赤痢菌の病原性に関わる研究などでも大きな発見をされています。先生の研究は微生物学、免疫学、公衆衛生学全般に及びますが、私はその解説者としては適任とは言えず、研究紹介はこの辺で留めておくのが無難でしょう。

先生はその温厚な人柄と、帝王学を修めておられたこともあり、いろいろな団体のトップを務められました。晩年はそうした仕事が多かったのですが、その一つが黒住医学研究振興財団での理事並びに理事長としてのお仕事でした。私も30年近く前から同財団の母体である「小島・福見記念会」の理事にしていただき、定期的に中谷先生や福見理事長とお話する機会が得られたことが望外の喜びでした。理事会の休憩時間には、福見先生と佐々木正五先生（東海大学名誉教授）が、国家・政治論から若い女性の行動学に至るまでの議論を戦わされるが恒例で、時折、中谷先生が割ってこられ、こちらが「ギクッ」とするような際どいコメントを入れられることがありました（**写真**）。

1993年には記念会は財団法人「黒住医学研究振興財団」に格上げされ、2010年には、早くも公益財団法人に認定され、各種事業が継続されています（**表**）。中谷先生は福見・佐々木両先生とともに、設立当初からの記念会の重要メンバーであり、福見先生ご逝去後の1999年からは理事長を務められました（2015年以降は相談役）。大変に有能な事務局の協力があったとはいえ、財団を通じてなされた日本の微生物学や免疫学、公衆衛生学の発展に対する先生の貢献も大きかったことは明らかです。

中谷先生、福見先生、佐々木先生だけでなく、故人になられた我々の先輩の微生物学者には学識、品格共に立派な方が多かったことに思い至っています。

こうした方々とお付き合い出来た幸運を感謝していますが、生前にお返しできなかったことが残念です。この所、淋しさを覚える時には、大伴家持の名歌を口ずさむことが多くなっています。

移りゆく　とき見るごとに　心痛く
むかしの人し　思ほゆるかも

図 1　中谷林太郎先生（後列左）、佐々木正五先生（後列右）、並びに福見秀雄先生（前列）　黒住医学研究振興財団の理事会にて。

表 1　黒住医学研究振興財団の歴史（http://www.kmf.or.jp/about/history より）

1965年（昭和40年）4月	小島三郎記念会（代表 福見秀雄博士）が発足し事務局を国立予防衛生研究所内に置く。「小島三郎記念文化賞」並びに「小島三郎記念技術賞」を創設
1965年（昭和40年）12月	第1回小島三郎記念文化賞を贈呈
1966年（昭和41年）9月	第1回小島三郎記念技術賞を贈呈
1980年（昭和55年）4月	事務局を日本医科大学衛生学教室内に移転
1980年（昭和55年）5月	小島三郎記念技術賞創設15周年を記念して小島三郎記念特別賞（福見秀雄賞）を創設
1983年（昭和58年）5月	小島三郎記念特別賞（福見秀雄賞）を「福見秀雄賞」に改称
1984年（昭和59年）5月	20回目の小島三郎記念文化賞の贈呈を機に「小島・福見記念会」に改称
1987年（昭和62年）5月	事務局を栄研ビル（東京都文京区）内に移転
1990年（平成２年）6月	京王プラザホテルにて創立25周年式典開催
1993年（平成５年）6月	栄研化学株式会社社長黒住忠夫氏の私財寄贈により「財団法人 黒住医学研究振興財団」が設立され、初代理事長に福見秀雄博士が就任
1999年（平成11年）12月	福見秀雄理事長逝去に伴い、東京医科歯科大学名誉教授中谷林太郎博士が理事長に就任
2008年（平成20年）7月	事務局を東京都台東区台東4丁目19番9号山口ビル7 栄研化学株式会社内に移転
2010年（平成22年）7月	公益法人制度改革に伴い、改めて「公益財団法人」として認定される
2012年（平成24年）10月	東京會舘において「小島三郎先生没後50年・財団創立20周年記念式典」を開催